

NOCSポッドキャスト

長崎の民話(長崎県北編)

台本朗読部分10話分

- 第1話 「めがね岩」「溶けてしまった侍」(佐世保市)
- 第2話 「蛇島」(佐世保市)
- 第3話 「松浦の赤烏帽子」(平戸市)
- 第4話 「狸櫓」「夜釣りの河童」(平戸市)
- 第5話 「サン・ジュアン様」(平戸市・生月島町)
- 第6話 「丹後の人柱」「穴ほげ地蔵」(松浦市・壱岐市)
- 第7話 「鬼と百合若」(壱岐市)
- 第8話 「京のさかづき」(対馬市)
- 第9話 「美人塚」「夕影山の主」(対馬市)
- 第10話 「狐の仇討ち」「金の茶釜」(対馬市、壱岐市)

第1話 「めがね岩」「溶けてしまった侍」

「めがね岩」

佐世保市は、西海国立公園の北の方の基地として、賑わっています。

また近くにも、大村湾にかかっている西海橋や、九十九島を眼下にながめる弓張岳、石岳の亜熱帯植物園と、楽しいことがいっぱいです。

またここに述べる「めがね岩」も、名物のひとつです。

市の真ん中から、北の方へ西肥バスで十五分、大野営業所の少し手前に、高さ六メートル、横の長さが二十メートルもある大岩が横たわっています。中が二つの穴になって抜けている珍しい岩で、俗にめがね岩と呼ばれているのです。

この岩のできたいわれに、おもしろい言い伝えが残っています。

大昔のこと、ここに大鬼が住んでいたました。付近にある高さに三百メートルもある石盛岳を枕にして、いつも気持ちよさそうに眠っていたそうです。

その「いびき」は大きくて、八十キロ四方に響き渡り、佐賀県の伊万里にまで、聞こえたといえます。

あるとき、この鬼が、目を覚まして、「うむ・・・」と手足を伸ばしてアクビをしました。このとき足元にあった岩に穴を開けて出来たのが、この「めがね岩」だといわれています。

石盛岳のすぐ下の知見(ちけん)寺には、この鬼が眠るとき、いつも肘をかけていたという、「鬼の肘掛け石」も残っています。(また、この岩は、太古の頃は、こちら一帯が海だったので、海水の侵食活動で、できた岩だろうと言っている人もあります。)

「溶けてしまった侍」

佐世保の町から柚(ゆ)の木の方に越える道は、山が深くて、昔は、九十九谷(つくもたに)と呼ばれていました。

松浦丹後守(たngoのかみ)が、平戸勢に攻められて、恨みをのんで滅んだという、大智庵城(だいちあんじょう)の城跡は、この辺だといわれています。またその落城のとき、死んだ人々の魂は大蛇にかわって、そこいらに住んでいるとも噂されました。だから、この谷に足を踏み入れて迷い込んだものは、二度と生きて帰った者がいないとまでいわれていました。

ある時のことです。

一人の侍(さむらい)が、柚(ゆ)の木に行こうとして歩いてきて、ついに、この谷に迷い込みました。そこはいまの瀬戸越(せとごえ)だそうです。

「はて、淋しいところへ来てしまった。道をまちがえたのかなあ。いまさら引き返すわけにもいかぬが・・・」

と思案して、とぼとぼと歩いて行くと、後ろの藪(やぶ)のほうで、ガサガサと音がします。息を殺してよく見ると、一匹の大蛇が、なにか呑み込んだと見えて、驚くほど大きくなったお腹をかかえて、苦しそうにのたうちまわっています。

そのうちに、鎌首を持ち上げて、側のシダの葉のようなかわって形をした一本の草を、食べ始めました。

「変なことをする・・・」と見ていると、みるみるお腹が小さくなって、気持ちがよくなったものか、そのまま、山の奥の方にするすると、姿を隠してしまいました。

「はて、珍しい草もあるものだ・・・」

とその侍は、小刀を抜いて、その草を根本から掘り起こし、それを懐(ふところ)に入れて歩き出し、やつのことで、柚の木(ゆのき)につくことができました。

「朝から、なんにも食っていない。なにしろ、腹がへった」

と、やってそば屋の看板のかかっている店を見つけて、その二階に上りました。

まず、ざるそばを三杯注文し、それをペロリと食べてしまいました。大のソバ好きだったとみえて、たちまち三十六杯たいらげてしまいました。

でも、さすがにお腹が一杯にふくらんだとみえて、仰向けに倒れて寝ていました。

女中さんが上がってきて、あきれかえってみると、

「なに、大丈夫だ」

と言って、女中さんを階下に下ろしてから、ふところから山の中で掘ってきた「れいの草」を出して、ムシャ、ムシャ食い始めました。

夕方頃になっても、侍は階下に降りてこず、二階は物音ひとつしないので、不思議に思って主人と女中さんが上に上ってみると・・・

空になった三十六杯のドンブリのむこうに、ソバの山が、刀を差して、あぐらをかいて座っていました。

大蛇の食べていた「あの草」は、身体を溶かしてしまう薬草だったのです。このソバ屋は、今の「堺木」(さかき)だそうです。

第2話 「蛇 島」

佐世保湾の西側の赤崎には、珍しい「蛇島」の言い伝えが残っています。いまから四百年ほども前の元亀(がんき)の頃、ここいらは相浦(あいのうら)の松浦家(まつらけ)の領地でありました。

松浦家(まつらけ)の家来で、佐世保に城を構えていた遠藤但馬守(たじまのかみ)には、花のように美しい一人のお姫さまがありました。

ある日のこと、主人にあたる相浦の城主、松浦親(まつら・ちかし)は、たくさんの兵を連れて、烏帽子岳に狩りをもよおして、かえりに、この城に立ち寄ったのです。盛んな酒宴が開かれました。

「舞をみたい」との親(ちかし)の所望(しょう)に、一指(ひとさし)舞った姫のあまりの美しさに、親(ちかし)は見惚れて、

「自分の妻にほしい」

と言い出しました。

しかし、この時、姫には既に、親類にあたる赤崎の城主の赤崎伊豫守(いよのかみ)と、幼い頃からの許嫁(いいなずけ)の間柄(あいだがら)であったので、これをキツパリとことわりました。

親(ちかし)は、これを恨みに思って、

「但馬守は、佐賀の龍造寺といっしょになって、平戸を攻める下心がある」

とありもしないことを、まことしやかに平戸の藩主に告げました。

そうして、あるとき、平戸と相浦との連合軍が、佐世保城に迫ったのです。

但馬守は、華々しく防ぎましたが、なにぶんにも、三倍に余る大軍に囲まれ、とうとう討ち死にしていました。

ときに元亀三年の十二月。

兵たちが親(ちかし)の命令で落ちた城の中を探しまわりましたが、姫の姿は見えないのです。そのうちに誰かが、

「姫は将冠岳(しょうかんだけ)のほうに逃げて行った」

と言い出しました。

そこで三十人ばかりの兵が、将冠岳へ登っていくと、そこの岩穴から、不気味な白煙がもうもうと立ち上り、一匹の大きな白蛇が、炎のような赤い舌を吐きながら、這い

出してきました。そして、「あれよ、あれよ」という間に、山を降り、海に入って、赤崎の前の浜に近い小島に泳ぎ着きました。

これを見た兵たちは、みな気が触れてしまいました。これからこの蛇を見たものは気が触れてしまうと、人々はおそれ、この島を蛇島と呼ぶようになりました。蛇島は、いまは陸続きになっています。

第3話 「松浦の赤烏帽子」

松浦氏(まつらし)は、平戸に居城を構えて、建久(けんきゅう)の昔から、九百年もの間、松浦四十八党の旗頭として、今の佐世保市から北松浦地方一帯に、睨みをきかせていました。

でも、なにぶんにも、室町幕府の表向きのお墨付き(かきつけ)を、いただいていたので、表向き的大名としては認めてもらえました。そこで、

「どうかして、幕府のお墨付きをもらいたい」

と心を砕いたのが、第二一代の天叟義公(てんせいぎこう)です。

そこで、義公(ぎこう)「よしひろ」こと是興(これおき)公は、ある時京都に上りました。でも、なかなか將軍にお目にかかるおりがないので、「人目にかかる、目立ったことをしてやろう」と思って、毎日、毎日、赤い烏帽子を頭に被り、平戸家の大紋(だいもん)のついた素袍(すほう)姿で、都の大路を歩きました。

この謀(はかりごと)は、凶(ず)にあたって、

「なんでも、九州のあたり的大名と聞いたが、珍しい男だ」

と忽ち、都中の評判となりました。

でも、肝心の足利義政將軍は、その頃新しく建てた銀閣に閉じこもって、お茶とか生花などと、風流な生活を楽しんでいて、めったに外に出なかったのも、なかなか会うおりもなく、三年の月日は流れてしまいました。

是興(これおき)が、「じりじり」していると、そのうちに將軍が、石清水八幡宮(いわしみずはちまんぐう)にお参詣(さんけい)になるということがわかりました。

その日になると、警護の武士が、町の辻辻を固め、取締りも、なかなか厳重でした。將軍の乗った牛車(ぎっしゃ・うしぐるま)が、いよいよお宮に入ろうとする間に、変わった様子をした男が一人、膝まづいています。

車の上から、義政公(よしまさこう)は見とがめて、

「何者じゃ」と声をかけました。男は頭をさげて、

「肥前の国、松浦郡(まつらぐん)の住人、松浦肥前守源是興(まつらひぜんのかみみなもとのこれおき)でございます。ちと、お願いの筋がございまして・・・」

「うむ。噂に聞いている赤烏帽子の男とは、そちのことか。いずれ、後で知らせる」と、お言葉をもらいました。

しかし、ここに困ったことがおこりました。

その頃、将軍は、手許に一匹の猿を飼っていて、この猿がご機嫌伺い(ごきげんうかがい)に出仕(しゅっし)した田舎侍に、ひどいいたずらをして、皆が弱りきっていたのです。

そこで、是興(これおき)公は、ひとつの方法を考え出しました。猿役人に「わいろ」を贈って、まずその猿を、自分の泊まっている宿に連れてこさせました。そして、その猿の顔を睨みつけ、頭をこづきまわし、

「おまえは、猿の分際で、おれが殿様の前に出仕するとき「いたずら」したら、痛い目にあわせるぞ」と言って、また、二度、三度、頭を小突き回しました。

いよいよ、その日は来ました。

将軍の左右(さゆう)には、京都にいた家臣や大名たちが、綺羅星(きらぼし)のように並んでいます。

「今日、お上(かみ)にお目通りするのは、評判の赤烏帽子の男というではないか」

「なんでも、九州あたりの荒大名(あらだいみょう)と聞いたが」

「でも、例の猿のイタズラには、面食らうだろう・・・」

と、ひそひそ話していました。

いよいよ、小姓(こしょう)に連れられて、是興(これおき)公が一段高い所に座っている将軍の前に近づこうとすると、後の方から、猿がヒョコヒョコと現れました。そして、いつものように、素袍(すほう)の袖を引っ張ろうとしましたが、是興(これおき)公がその顔をハタと睨むと、猿はすくみあがってこそこそを、将軍の後ろに隠れました。

「これは、だたの男ではない・・・」

大名たちは、目と目をあわせました。

「今日、出仕をお許しいただきまして、身に余る幸せでございます」

と、是興(これおき)公が申し上げると、西海(さいかい)の日に焼けた、いかにも頼もしいその顔や様子を将軍は眺めて、

「肥前守として、松浦一帯を治めることをさし許す。また、今日の祈念として、わたしの名前義政の一字を遣わすから、義公(よしひろ)と名乗るがよい」

と、いいました。

また、ある本には、義政公は「赤烏帽子をかぶるの図」を描いて、与えたとも伝えられています。

第4話 「狸櫓」「夜釣りと河童」

「狸櫓(たぬきやぐら)」

平戸城、またの名を亀岡城は、元禄の頃に築かれたもので、山鹿素行(やまがそこう)が設計されたと言われている名城です。

春は、お城の中いちめん桜が咲き乱れ、桜の名所になっています。ここで名物の「おーもんでー」踊りが踊られたりするのです。また、この事務所には、国宝にもなっている「環頭の太刀(かんとうのたち)」が納められています。これは、二千年前の後漢時代の中国の物といわれる、珍しいものです。

今は、天守閣も見事に復元されて、その最上階からは、眼下に平戸の瀬戸の渦潮も眺められ、素晴らしい瀬戸の眺めです。

その入口にある北虎口門(きたこぐちもん)のかたわらに、一階建ての小さな建物が残っていますが、これを俗に「狸櫓」とよんでいて、いまでも狸が住んでいるといわれています。

これは、はじめは物置だったのですが、昔は、この城山一帯は狩りが禁止されていたので、いつのまにか狸どもが、呑気に住んでいたのだそうです。

いまから、百二・三十年ほど前、観中公(かんちゅうこう)の時のことです。

この櫓と取り壊して、修理にかかろうとすると、夜、殿様のご寝所に、狸があらわれて、

「わたしどもは、長年あの櫓に住まわさせていただいています。どうか、このままにして、床下にでも住まわせてください」と願いでたので、今も、そのまま残っているとされています。

「夜釣りと河童」

平戸のお城の前あたりに、小倉さんという家老も務めたお侍が住んでいました。

大の釣り好きで、ある日の夕方頃から、一人で平戸の瀬戸に、夜釣りに出かけました。

しばらくして、ひどく雨が降りだしたので、うちでは、下男の権助に、傘を持たせてやりました。

雨の中を傘をもって、権助が護摩堂の山の森を抜けて、八幡神社の坂を下ると、海辺の方から、波の音が聞こえてきます。

耳を澄ますと、この波の音に混じって、

「ひょー、ヒョー」という、奇妙な声が聞こえるのです。

なおも坂を下って下の草原を見ると、そこに何か、黒いものが蠢(うごめ)いているようです。よく見ると、身の丈は、五、六歳位の、痩せてひよろひよろした子供の格好をしたものが、なにかやっています。

「河童だなあ」と権助は、こう思いました。

権助の姿を見ると、河童の一人が飛び出してきた

「いっちょう、相撲をとろう」と、挑んできました。

「旦那の傘を持って海辺にいきよるけん、今はできん」

と言って、権助は断りました。

さて、海辺について、旦那に傘を渡しました。釣りも終わったので、旦那の後をついて、お厩(うまや)のところまで来ると、また後から河童どもがついてきて、

「約束のごと、さあ、やろう」と寄ってきました。

小倉さんが家に帰ってくると、後から、ついてきたはずの権助の姿が見えないので、不思議に思い、ほかの二人の下男を探しにやりました。

二人がお厩のところまで行ってみると、権助は、ショボショボ降る雨の中に、雨にぬれて、魂の抜けた様にして立っています。顔も身体も、泥だらけです。

「おい、権助。どうした」と声をかけると

「おまえたちの姿を見て、河童どもが逃げてしもうた」

と言いました。そして、

「河童どもあ〜、頭の毛がモジャモジャしとって、まんなかagakぼんどった」と言いました。

第5話 「サン・ジュアン様」

平戸は、天文(てんもん)十九年(1550年)、フランシスコ・ザビエルがこの地を訪れてから、カトリック教が非常に盛んになりました。

ことに、平戸の北にあたる生月島(いきつきしま)は、領主の籠手田定経(こてだ やすつね)が、まずすすんで洗礼を受けたところから、ほとんど全島が、キリシタンというありさまでした。

でも、この地方にも、秀吉の禁令後は、次第に弾圧の嵐は、吹き荒れてきました。特に、ひどかったのは、慶長八年(1603年)でありました。

「キリシタンの種を一人残さず、潰してしまおう」と意気込んだ役人の手によって、信者たちは、次々に捉えられていきました。

ジュアン坂本、ダミアン出口はふたりともに、生月島の武士でしたが、このときカミロ神父とともに捕らえられて、館の浦(たちのうら)の牢屋に入れられました。やがて、ここを出されて処刑のために、平戸の沖合の中江ノ島に送られることになりました。中江の島は、平戸の町からわずか八キロの沖に浮かんでいるデコボコの岩ばかりの無人島です。

ジュアンはこの時31歳、すすんで櫓を漕いで青い海を眺めながら、美しい声で賛美歌を歌いました。ダミアンは43歳、だまって船縁に腰を下ろし、目をつぶって、その歌を聞いていました。

島に上がって、二人とも役人に斬られましたが、その死体は、袋の中に詰められて、海の底に沈められました。

そのあとで、二人の家族のものも、処刑されることになっていましたが、両家のものたちは、違った船で島に送られました。船が岸につくと、みな上にあがって、互いの顔と顔を見合わせました。そして抱き合って、

「互いに、天国で、またお会いしましょう」

と、肩をたたきあいました。

まず、ジュアンの妻のペアトリスが、一番先に切られ、次に七四歳になっていた母のイザベラ、次に一三歳の長女アダレイナ、と子供四人が次々と斬られました。

ダミアンの子供三人は、めいめい頭に袋を被せられ、いっしょにひとつの俵に詰められて、生きながら海に投げ込まれました。

その年の六月八日、ジュアン次郎左衛門が、処刑されることになったのです。ジュアンは、立派な指導者として、信者たちの信頼を一身に集めている人物でありました。

島に送られて、いよいよ処刑される前に、役人たちは、仏教の御札を見せて、「これを吞め、そうしてキリストの教えをやめよ」

と言いました。しかし、ジュアンはキツパリとそれを断り、天の一角をみつめて、「ここから、天国はそう遠くはない」と叫びました。そうして、やがて斬られてその場に倒れました。

これから、この中江ノ島を誰言うもなく、「サン・ジュアン様」と呼ぶようになりました。

そうしてここを聖地と呼び、洗礼に使う「お水」は、かならず船に乗ってこの島に来て汲むことにしました。どんな日照りの激しい年でも、この島の岩の割れ目に棒を差し込んで、「オラシヨ」を唱えると、冷たい水が「こんこん」と流れ落ちてきました。この水を瓶に入れて持ち帰ったのです。

また、月の明るい晩などは集まって、殉教者たちを偲んで、

まいろうおやなあ まいろうやなあ
パライソの寺にぞ、まいろうやなあ
広い寺と申すぞなあ
広いセバイは、わが胸にあるぞやなあ

と唄いました。パライソというのは、ポルトガル語で、天国という意味です。

第6話 「丹後の人柱」「穴ほげ地蔵」

「丹後の人柱」

今福小学校の前の、校門から少し離れた県道にそって、大きな松の木があり、その下に、古い碑がたっていて、昔から「人柱の碑」と呼ばれています。

天文八年(1539年)のことと、言われています。その頃の、ここいらの領主の丹後守政公(まさひろ)が、この海岸を埋め立てて、新しい田を作りたいと思いたっていました。しかし、なにぶん玄界灘の波が激しく打ち寄せるところで、堤を築いての汐留め工事は、なかなかの難工事です。

殿様は、家来の田代という人にその工事の監督を命じました。工事は次第に捗りましたが、いよいよお終いの、汐留めというときになってから、天気が悪く、海の波が高く押し寄せて、堤は幾度築いても、押し流されてしまいました。費用はかさむばかりです。

「幾度築いても崩れるばかり・・・」

「もう土運びもあきあきした・・・」

と人夫たちも飽きてきて、次第に働くなってきました。

あるとき、田代さんは、皆を松の木の下に集めて言うには、

「皆の知っているように、仕事はいま一息というところまで来て、はかどらない。これはきっと、この今福の浜の神様が、この埋め立てをお嫌いなのかもしれない。昔から人柱をたてて、お慰めしたと聞かすが、私も、それをやるよりほかはないと思うが、どうだろう？」と言い出しました。

これを聞くと、人夫どもは、互いに顔を見合わせて、

「では、誰がその人柱になるんです？」と一人が尋ねると、田代さんは、おだやかに、「しかたがない。誰かは、ならねばならぬ。お互いの袴の裏を調べて、もし「つぎ」があたっているものがあつたら、その人に決めよう」と言い出しました。そこで、皆が、めいめいに袴を調べましたが、誰のにも「つぎ」がありません。おしまい、田代さんが、自分の袴を調べると、裏に、大きな「つぎ」があたっていました。

驚いて皆は、顔を見合わせました。

「私が言い出したのだからしかたがない。私が、人柱になろう」

こう言って、田代さんは、家に帰っていきました。

いよいよその日は来ました。田代さんは、たくさんの人々や人夫たちに見守られながら、堤の底深く埋められました。

「田代さんは、はじめから自分が人柱になろうと、心で決めていて、あのようなことを言い出したのだ。あの人は、そのような心の立派な人だったのだ・・・」誰いとなく、村の人はこう言いました。

田代さんに一人の娘があつて、牡丹のように美しく、器量良しで評判でした。

ところが、どうしたことか、父にこのようなことがあつてから、「ぷつぷつ」と物を言わなくなりました。でも、所望する人があつて、隣村の庄屋の家の長男に、輿入れすることになりました。

目出度く「さかづき」もすんで、その庄屋の家に行きましたが、なにぶん、物を言いません。

「おいしい娘だが・・・これでは・・・」というので、実家に返されることになりました。籠に入れられて、浜を通りました。新しく埋め立てられたところです。

するとこのとき、森蔭から一羽の雉子が、

「ケン、ケン」と鳴きながら飛び立ってきました。すると、籠の脇についていた花婿の息子が、持っていた弓でそれを「ひと矢」に射落しました。これを、籠の中で見た娘は、

「ものいわじ父は丹後の人柱 雉子も鳴かずばうたれまじきを」

と、すらすらと一首の歌を詠みました。

「しゃべれないのでなく、娘は、父の死を悲しんで、物を言わずにいたのだ」

と、皆感心して、娘はめでたく庄屋さんの家に帰っていきました。

田代さんの埋められたところには、冥福を祈って、地蔵様が祀られましたが、その後が今でも残って・・・いるのです。

「穴ほげ地蔵」

芦辺の町から、東の方に八キロばかり離れた八幡半島の突端の、八幡が浦の海岸の海の中に、六体の石の地蔵様が、ぽっかり波の上に、浮かんだようにして立っています。

もう頭がかけ落ちて、かわりに石の頭が乗せられたりしたものもありますが、どうしたものか、みな、お腹に、ぽっかりと穴があいているので、いかにもユーモラスな格好です。「穴ほげ地蔵」と、呼ばれ愛されています。

この地蔵さまについては、次のようないわれがあるのです。

昔この村に、一匹の親狸が住んでいて、六匹の子狸を抱えて、森の穴の中に住んでいました。ところが、ある時、いたづらな村の子供たちが、柴だの、薪だのを集めてきて、その穴の入り口を塞ぎ、火をたいていぶりだしたので、かわいそうに、その子狸たちは、みんな死んでしまいました。親狸は、やっと穴から飛び出して助かったのですが、それから、「子供のかたき」とばかり、夜中になると、浦の家々に火をつけて、焼き討ちをはじめました。

漁師たちは、慌てて、夜中寝ずの番をたてて防いだので、焼き討ちはやんだのですが、そのかわりに、村に赤痢が大流行して、死人も出てきました。

「狸のたたりには違いなか。どうかして、死んだ子狸の霊を慰めることはできまいか？」

と村の人たちが集まって、相談して建てたのが、この穴ほげ地蔵だといわれています。

また、昔は、ここいらから勝本にかけては、名高い捕鯨の基地で、たくさんの鯨がとれたのですが、あいだには、子鯨もとれたので、その親たちを慰めるための「鯨の墓」だろうという人もあります。

それなら、どうしてお腹に穴があいているのか、というと、「そこにお賽銭をあげるためだろう・・・」とまことしやかに、言うものもあります。

陸の上に上げると、たたりがある・・・というので、いつまでも海の中に、祭ってあるのだそうです。

また、このあたりには、縄ふんどしの女の海女さんがたくさんいるので、名物になっています。これらの人々は家船(いえぶね、とかいて「えぶね」)に乗って、よそから住み着いたものだそうです。

家船というのは、一艘の船を自分の家として、その中に、家族みんなが生活している人々のことで、長崎県の離島の海岸には、たくさんいた・・・ということです。

第7話 「鬼と百合若」

壱岐の島には、鬼の岩屋と呼ばれている古墳が、いたるところにあります。とくに、那賀村の国分や、鯨伏村の立石にあるものなどは、周りが数十メートルもある大きなものです。

古墳は、大昔の人の墓ですから、これだけの墓を作るには、よほど勢いの強かった人が住んでいたと想像されます。また、これらの古墳の中からは、青銅のホコや、貨泉(かせん)と呼ばれる中国の昔のお金が出たりして、昔のこの島のことを調べるのに、大層役立ちました。

さて、どうしてこの古墳を、「鬼の岩屋」と読んでいるのでしょうか。

それには、大変面白いお話があります。

大昔には、この島には、たくさんの鬼どもが住んでいました。その大将は遠見(とおみ)の次郎と、礫(つぶて)の三郎でありました。

遠見の次郎は、その名のように、何千メートル先の海に浮かぶ船でも、目ざとく見つける目を持っていましたので、見張りの役で、いつもこの島の南の端の、筒城(つづじょう)の海岸の上に胡座(あぐら)をかいて頑張っていて、見張りの番をしていました。

礫の三郎は、これも名のように力が強くて、大きな岩でも軽々と担いで、小石のように投げ飛ばすことができました。

あるとき、九州中の神様が、筑前の国の山の上に、お集まりになったことがありました。このとき、ある神様が、玄海の海の上に美しく浮かんでいる緑のこの島を指さして、

「あの島は美しいが、実は鬼どもが沢山住んでいて、人民を虐めている。誰か征伐に行く者はないかなあ」と言って、

そこに座っている神様方を見回しました。みな顔と顔を見合わせて、尻込みしていると、この時、

「私が、行きましょう」と、すくっと立ち上がったのは、百合若大臣でありました。百合若は強い弓を引くことができるので、聞こえていました。

百合若は、四万八艘の小船に、沢山の家来を乗り込ませて、壱岐の島に押し渡りました。小船が、名島の近くまで来ると、早くも、これを見つけたのは、筒城の岩の上に頑張っていた、遠見の次郎です。

「すわこそ！ 一大事」と、このことを島中に触れ回ったので、鬼どもは、慌てて大きな風の袋を、エッサエッサと担いで来て、筒城の海岸の大岩の上に乗せ、切り破ったからたまりません。

さあ、海上は、にわかには大風になって、押し寄せてきた小船は、木の葉のように、波に押しまぐられました。

ただ、百合若大臣の乗っている船だけは、波の間をスイスイ走って、岸边に着いたのです。

これを見て、礫の三郎は、大きな岩を担いで、手当たり次第に、投げつけます。手下の鬼どもも、みな石や岩を、雨あられのように投げつけました。

百合若は、右手に日ノ丸、左手には大弓を持って、この岩を受け止め、受け止め、のっしのっしと歩いて来ました。いまでも、この海岸には、「百合若様の足あと」という窪みが残っています。

さすがの大將の遠見の次郎も怖くなったのか、逃げ出してしまいました。百合若は、城の岩屋の中に隠れていた礫の三郎を探し出し、その首を刀で斬り落とすと、首は空高く飛び上がり、それが落ちて来て、百合若の兜に食いつこうとしました。そこで、百合若は、「ハッタ」と空を睨みつけ、「俺の兜は、十四重(え)になった鉄で出来ているから、食らいついても、だめだっ！」と叫ぶました。

すると、首は、ドット音をたてて、足元の砂の上に落ちてきました。勢いにのまれた鬼どもは、百合若の前に跪いて、

「どうか、命だけはお助けください・・・」

と言って、涙をボロボロとこぼし、片目の鬼は、礫からサザエやアワビをとって来て捧げました。

コソコソと逃げ出す鬼もありました。なお、手向いしようとする鬼を、百合若は、弓の先につっかけて、

「お前たちは天に昇ってしまえ！ お前たちが地上に降りてくるときは、いり豆に芽が出る時か、枯れ木に花が咲く時だ！」

と叫んで、弓を振ると、その鬼の姿は、天に飛んでいって消えてしまいました。

この島では、今でも正月の七日の晩は、家々で「炒り豆」を撒いて、「鬼は外、福は内」と呼ぶ行事がありますが、この言い伝えからきているといわれています。

第8話 「京のさかづき」

若い息子が、年の初めの初夢に、よい夢を見たので、目が覚めてから、ニヤニヤしながら、そのことを父に話すと、

「その夢、話してきかせんか？」と言われました。

でも、「一週間は、話すな、ちゅうことじゃったケン。話されん」

と断りました。一週間たったので、今度はお母さんが、

「そん夢、話してくれんか？」と言うと、

「・・・ま、一週間は話されん・・・」と答えました。

こうして、一週間、一週間と次第に延ばしていくので、しまいには両親が怒り出して、

「おまえんごたるもんは、家を出ていけ」

と、家を追い出されてしまいました。

仕方なく、山道を歩いて行くと、一軒の岩屋に行き当たりました。ここは、盗人(ぬすつと)の隠れ家でした。

そして、盗人の頭が現れて、

「ここは地獄の一丁目だ。来る道はあっても、帰る道はなか。どうしてここへ来たか？」

と聞きました。そこで、この間からの初夢の話をするので、

「おもしろか話だ。おれに、その初夢、話して聞かせんか？」

と言いました。息子が頭を捻っていると、

「めったになか、こお岩屋一番の宝物ば見するけん。話して聞かせろ！」

と頭は聞きたくてたまりません。

息子が明日の朝は話して聞かせると約束しますと、頭は息子を岩屋の奥に連れていき、一つの古ぼけた升を持ってきて、自慢たらたら言いました。

「この升は、ただの升じゃなか。右の上の端を撫でて、家、倉建てろ！ と言えば、家や倉が建つ。右の下を撫でて、金(かね)、酒、米出てこい！ と言えば、金でも酒でも、米でも出てくる。

左上を撫でて、「ベヨーヘイヨー！」と言うと、死ぬ病人でも病が治る。左の下を撫でて、千里飛べ！と唱えると、千里も飛ぶことができる。」

息子は黙って聞いていましたが、その夜、皆が寝静まったのを見計らって、こっそり岩屋の奥の部屋に忍び込み、その升を盗み出しました。

そして、左の下の方を撫でて、「千里飛べ！」と唱えると、軽々と身体が空を飛んだかと思うと、とある橋の上に降りました。夜も明けて人が通り始め、次第に賑やかになったので、通っている人に、「ここはどこですか？」と聞いてみると、そこは京の五条の橋の上でした。

少し歩いて行くと、人だかりがしているある大きなお屋敷の前まで来ました。家の中が沈んでいる様子なので、訳を聞くと、その家は天皇様に使える姫の家(うち)で、そのお姫さまが重い病気になり、薬よ、医者よ、と手を尽くしましたが、とても助かりそうもないので、皆が弱りきっているということでした。

そこで、息子が、「どんな病でも治す行者でございます」とお屋敷の人に言いますと、早速姫の枕元に通されました。

息子が、升を取り出して左の上を撫でながら、「ベヨーヘイヨー」と大声に唱えると、忽ち姫君が元気づき、

「水が飲みたい。ご飯が食べたい。」と仰言いましたので、皆はすっかりびっくりしてしまいました。

「あなた様は、姫の命の恩人・・・」と皆が喜んでいると、今度は姫の方から、「どうか、私の手の届く所まで、来てください。」というので、息子が枕元に近づくと、お姫様から目出度く杯をもらいました。

息子の見た夢は、「朝日枕に、お月様を抱いて、京(きょう)のさかづき手に受けた」という夢でした。

第9話 「美人塚」「夕影山の主」

「美人塚」

豆酸村(つつむら)には、「美人塚」という塚があり、ここには、鶴王御前を祭ってあると言われていました。

鶴王は、この村の生まれでしたが、生まれつき、月のように美しく、その上親孝行だったので、その評判は遠く京都にまで伝わりました。

そうして、天子様の御前に奉仕する采女(うねめ)に選ばれて、都に上らねばならぬことになりました。「対馬の誉れ」と、村の人は、皆喜びましたが、鶴王の心は悲しかったのです。

というのは、年をとった母があったからでした。でも、その日は、とうとうやってきました。重い心で支度を済ませ、都に登るため、途中の府中まで来ましたが、

「美しく生まれたため、こうなってしまった。美人は私一人でたくさん」と、舌を嚙んで、死んでしまいました。

村人たちは、鶴王の心根を哀れに思い、その後に、この塚を作ったのであります。

豆酸村(つつむら)は美人が多かったので、「ご領主様に召されぬように」とそれからは、娘たちはわざと目立たぬように、継ぎ接ぎの「筒袖」「はぎとうじん」と着るようになりました。

その風俗は、今でも残っており、娘たちが、緋(かすり)の「はぎとうじん」を着て、島の名物の小さな対馬馬に乗って行く姿は、伊豆大島の「あんこ」の風俗にも似かよっていて、今でも、対馬名物の一つとされています。

「夕影山の主」

上対馬の網代村(あじろむら)の裏手の山を、夕影山(ゆうかげやま)と呼び、また、その前の入江を、夕影湾とよんでいます。

昼も暗いほど「みっしり」と木々の茂った、神代(かみよ)もそのままといたいほどの原始林です。

山全体が神山(しんざん)なので、神主さんでも、よほど身を清めねば、この山には入りません。この山の中でものを言うと、崇りがあるというので、人々が山に入った

ときは、口をつぐんで絶対に物を言いません。夕影さまは荒神様で、霊験があらたかということで、昔は、代々の対馬の殿様が、参拝される習わしになっていました。

でも、なんども社殿を作っても、倒れてしまうので、今はお社も建っていません。海辺にそうて、「魚石(まないし)」と呼ばれる岩がありますが、この岩に腰掛けると俄にお腹が痛むといわれています。十五日のお祭りの日は、村ではこの石の上に生きた魚をあげる習慣になっています。

この人は、たくさんの氏子や、近くの村々の人たちがあつまり、湾で行われる「船漕ぎ競争」は、上対馬の名物の一つとなっています。

さて、この山には、今でも、一匹の白蛇が住んでいると言われていています。

昔、奈良朝の頃は、付近に西の泊まりは、その頃の都から唐の国に渡った遣唐船の、我国での最後の寄港地として、賑わっていました。

ある年のことです。遣唐使の一行が、この西泊に止まっていたましたが、その中に小麿(こまろ)という若者がおり、言い交わした牡丹のように美しい姫を、都に残してきていました。

この姫が、小麿をしたって、はるばる九州にくんだり、この港まで訪ねてきたのです。ところが、あいにく船は唐の国へ出帆した後でした。

恋焦がれてきた小麿の姿を見ることができず、姫は俄に病気になり、焦がれ死にしてしまいました。その死骸は海に落ちて夕影山に流れつきましたが、一匹の白蛇になって、山の中に入ってしまった。

唐に渡った小麿も、姫のことが忘れられず、長安の都に着いてからも、毎夜奈良の都の空の方を眺めて、笛を吹き鳴らして、気を紛らせていました。

やがて仕事も終わったので、都へ帰ることになって、また、この西泊に来ましたが、ここで姫が自分を訪ねてきて、待ちきれずに、死んでしまったことを聞いたのです。

あまりのことに、小麿も哀しみに沈み、とうとう死んでしまいましたが、その死骸も同じように海に落ちて、この山に流れ着きました。そして白蛇の姿になって、山の中に入っていました。

「続古今和歌集」という本には、この夕影山を詠んだ、二つの歌が載っています。そのうちの一首、

雨晴るる 夕影山に 鳴く蟬の 声よりおつる 木々の下露

(あめはるる ゆうかげやまに なくせみの こえよりおつる きぎのしたしも)(大納言俊光の女(むすめ)作)

第10話 「狐の仇討ち」「金の茶釜」

「狐の仇討ち」

あるところに、狐のよく出る峠がありました。狐は、腰の曲がったお婆さんの姿に化けて出て、村の人たちをたぶらかしているという評判でした。

三吉という利口な男が、

「俺が、一つ行って捕らえてくる」と、こう言って、あるとき馬に鞍を載せて、その馬をひいて出かけました。

噂のある高い峠道にかかると、一人のお婆さんが、道端の石に腰掛けています。「もし、もし、お婆さん。その年じゃ。この峠を越えるのも、えらかろう。この馬にお乗りなさいよ……」

といて、無理に載せて、

「この馬は暴れ馬じゃけん」

といて、身動きできぬほど、かんじがらめに縛り付けました。

そして馬を引いて、道道歩きながら、

「婆さん、おまえさんは、何が一番、おそろしかなあ？」

と聞くと、

「わしゃあ、犬さ。おまえさんは何かね？」

というので、

「おりゃ、金が一番こわか」

と三吉は答えました。

そうして、向こうの村に着くと、お婆さんを馬から降ろし、そこいらの犬を集めて、けしかけたからたまりません。お婆さんは青くなって、だんだん小さくなり、草履に化けてしまいました。

三吉は、その草履を拾って袋に入れ、道端の枯葉を集めて火をつけ、煙で燻しはじめました。

「助けてくれ！ 助けてくれ！」と袋の中から悲鳴をあげるので、

「助けてやるけん。金の火鉢になれ！」と言うと、キラキラ光る金の茶釜になりました。三吉はそれをかかえて庄屋さんの家を訪ね、百両で売りました。

「めったになか茶釜じゃけん。大切にせにゃ。よう油紙でふきなハイ」

と庄屋さんが言うので、番頭が拭いていると、茶釜が、「そこは目、そこは鼻」とものを言うのです。気味悪がって、そのことを話すと、庄屋さんは、
「百両もする茶釜じゃけん。ものぐらいはいわにゃ」と答えました。
「よう拭いたら、熱かお湯を入れてみなハイ」というので、
番頭が火鉢にかけて、蓋を取り、あつい湯を入れると、茶釜は、
「あつつ、あつつ、あつい・・・」と叫んで、灰を撒き散らして、逃げて行ってしまいました。

その晩は嵐でした。

三吉が早くから戸を閉めて寝ていると、外から、ドンドン戸を叩く者があります。狐が仕返しに来たのです。

「三吉、三吉」と起して、戸の隙間から、バラバラ小判を投げ込みました。

三吉は布団から頭を出して、

「おそろしかあ、おろそしかあ・・・」

と震えたような声を出すと、狐は、

「これでもか、これでもか・・・」といよいよ小判を投げ込んだので、三吉はおもわぬお金持ちになりました。そして、楽に暮らしたということです。

「金の茶釜」

昔、芦辺に実伊(じつい)という行商人がいました。海岸から、魚や鯨の肉を村の方へ担いで行って、代わりに、郷ノ浦から、米を買って帰りました。

ある年の暮の二九日のことです。

いつものように、芦辺から長松までくると、道端に、狐が三匹あつまって、なにか相談しています。

「いよいよ今年も、年の晩もちこうなっちしもうたの。どうか、よか年とらにゃならんが、よか智恵はあるめえか」

「おりゃ、ひとつヨカ考えがある。聞いちくれろ。一匹が、金の茶釜に化けち、一匹や・・・実伊(じつい)どんに化けち、郷ノ浦に持って行って売る。売られたもんは、直に化け変わって戻ってくる。そうして、儲けた金は山分けて・・・」

「そりゃ、よかけんど、だれが茶釜になるけ？」

互いに、顔を見合わせていましたが、そのうちに一匹が、茶釜に化けました。

このとき、松並木の陰に隠れていて、これを見ていた実伊(じつい)が、ふいに飛び出したので、狐どもはたまげて、逃げてしまいました。

実伊は、その狐の化けた茶釜を、大切そうに風呂敷に包んで、渡良の太平寺に持って行って、二百両で手を売って売り払いました。

和尚様は、いい買い物をした、と顎を撫で回し、小僧を呼んで、

「この茶釜は、朝夕湯をたつること、やすもんじゃなか、よく灰汁(あく)ば抜いて磨き、油紙で拭いておかにやあ」と言いつけました。

小僧は言われたとおり、抱いて磨きにかかると、急に茶釜が、「けん、こん」と声を出しました。小僧がびっくりして、そのことを言うと、和尚様は、

「それがやむまで、ふきなはい」と言うので、小僧が力任せに、ゴシゴシこすると、茶釜は、「けんこん、けんこん、けんこん」と叫んで、外に飛び出してしまいました。

実伊は二百両を懐に入れて、また長松に差し掛かると、二匹の狐がよって相談しています。そこへ、太平寺から宙を飛んで、一匹が帰って来ました。そうして、詳しくあったことを話すと、

「なりやあ、はよう、芦辺に行っち、金はとりかえさにやあ」

と言って、三匹は芦辺の方へ歩いて行きました。

実伊は近道を先回りして、家に帰りつき、今度は、米を買いに行く格好をして、二百両の金を袋に入れて、六尺棒の先に結びつけ、それを担いで郷ノ浦道へ歩いて来ました。すると、さっきの狐どもが、道の先に現れて、

「実伊、実伊、じごなめろ」といつてからかいました。実伊は袋の中から、五十両を取り出して、道に放り出し、「こん畜生どもあ」と追いかけてました。

狐どもは、「百五十両は、実伊どんにくれてやろう・・・」と言って、後も見ずに言ってしまいました。

この後は、夜中でも、

「実伊どんは知らんか？」と言うと、狐どもはそのまま手を引いた、ということです。

了